

---

# 時期外れの子供

葉室 笑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

時期外れの子供

### 【Nコード】

N6834Y

### 【作者名】

葉室 笑

### 【あらすじ】

異世界からこの世界にやって来て、この世界の人々に紛れてこっそり定住した、『マレビト』と称する人々の子孫のお話です。

同族同士でしか子孫を残せないため、次第に数が減って、既に『誰が最後の一人になるかな?』くらいの状況になっています。

この話では、当事者3名のうち2名がまだ子供で、ほぼ状況説明になっています。

『時期外れの子供』として、私は生まれた。

\*\*\*\*\*

「じゃあ、伯母さん、雅也をお願いしますね」

「はいはい、まかせてちょうだい、早苗さん」お祖母ちゃんが、明るく請け合う。

「有り難うございます。いい子にしてるのよ、まあ くん」

早苗さんはお兄ちゃんの雅也くんにそう言つと、妹の唯菜<sup>ゆいな</sup>ちゃんを抱き上げた。二歳ともなると、さすがに少し重そうだ

「うん。行ってらっしゃい、お母さん。ゆいも」雅也くんが手を振る。

幼い兄妹が手を振り合う様子は、何とも可愛らしい。

二人がまだ幼いからでも、身内の欲目だからでもなく。客観的に見てもこの兄妹は、実に見目が良い。腕のいい人形師が、対で作った人形のようにだと、ときどき思う。

「弥生ちゃんも、よろしくね、雅也のこと」

「分かりました。夕方までお預かりしますね」私は、とりあえず早苗さんに、にこやかに頷いておく。

二人を見送った後、お祖母ちゃんは雅也くんに向き直る。

「さてさて、お昼は何が食べたいかね。お祖母ちゃんが支度するか。弥生、雅也くんの相手をしてあげ」

「はあい、お祖母ちゃん」

雅也くんを預かる時は、いつもお祖母ちゃんが家事をして、私が彼の相手をする。逆でもいいはずなのに、そうはならない。

実はこれは、変則的な『お見合い』のようなものではないかと、ちらっ思ったりする。大学生の私の『お見合い』の相手が、七歳児。あり得ないと言いたいが、そう言い切れないところが、不気味だ。

「さて、今日は何していようか。雅也くん、勉強道具は持ってきた？」

「うん、ドリル持ってきた。漢字ノートも」

「そっかあ。じゃあ、まずそれからやっちゃおうか」

私は彼の手を引いて、居間に向かう。

二年前のことだった。早苗さんに泣きながら懇願されたことがある。

『お願いよ、弥生ちゃん。どうか、雅也のお嫁さんになってあげて』

笑い話にしたいところだが、早苗さんはどこまでも、マジだった。

それにはもちろん、事情があるわけだけど。

「雅也くん、飲み物何がいいの？ 牛乳？ それともジュースにする？」

居間の座布団に座って、ノートを広げ始めたところに、尋ねると。

「うーんと、牛乳？」

首を傾げて、はにかんだように笑う様子も、この年頃だと妙に可愛らしい。

私たちのような存在を、『マレビト』というのだそうだ。異世界からやってきて、この世界の人々に紛れてひっそりと暮らす、言わばこの世界の異分子だ。やって来たというのは、私たちの遙か先祖のことで。私たち子孫は、この世界で生まれ育ち、この世界しか知らない。いつ頃、どんな事情で、何人くらいで来たのかも、今となっては皆目、分からない。

この世界に元からいる、『在来種』の人たちと、姿形も、食べる者も同じ。

だけど、違う。

私たち『マレビト』は、同族同士でしか、子孫を遺せない。在来種の人たちとの間では、子供は授からないし、そういう意味で体が反応することもない。

周りにどんなに大勢の在来種の人がいっても、同族の中で伴侶を見つけれなければ、生涯を一人身で過ごすしかない。

それはとても寂しいことだと、皆には思われている。

だから、同族の人たちは、示し合わせて同じ時期に子供を持つようになっているし。私のようにひょっこり出来てしまった、時期外れの子供は、とても不憫がられる。

私と一番歳の近い同族の男性達とは、上は二十ほども離れていて。

私より年回りの合う女性達、父の従姉妹の早苗さんや、その妹の香苗さん達が、生まれながらの許婚者として居たし。

私より下は、十いくつも離れた雅也くんだけ。そして、その相手としては、彼の二つ違いの従姉妹の、まどかちゃんがいた。

「牛乳、ここに置いとくからね」

「うん。ありがとう」

お礼を言つて、ドリルに取り組み始めた雅也くんの側で、私は居間に持ち込んだ資料を広げ、ノートパソコンを起動する。

レポートの締め切りにはまだ間があるけど、仕上げておくに越したことはない。

書きかけのワープロの文書を開いて読み返してから、ふと見ると、雅也くんはドリルに集中しているようだった。

こうなると、しばらくはこのまま放っておいても大丈夫。

預かるにしても、あまり手がからない子なので、正直助かる。

町中で見かけるこの年頃の子は、もっとおしゃべりで落ち着かなくて、ちよろちよろ動き回る印象があるのだけど。雅也くんはいつ来ても、割合大人しい。静かに勉強しているか、本を読んでいることが多い。

唯菜ちゃんは今もうちょっと人懐っこくて話好きだけど、やはり騒がしい方じゃない。ひっきりなしに喋ったり、やたらに走り回ったりはしないみたい。

それが、同族の子供の特徴かどうかは、サンプルが少なすぎて、判断できない。自分の子供の頃のことなんて分からないし、同族で小さい子なんて、今は雅也くんと唯菜ちゃんの二人しかいない。

本当に、二人だけ、なのだ。

二年前。早苗さんの妹の、香苗さん一家が亡くなった時に、一族皆の受けた衝撃は大きかった。

交通事故とはいえ、こちらにはまるで非が無いのに、まだ若い夫妻と幼い子供二人が犠牲に、というのはあまりにも理不尽なことだった。それに。

亡くなった二人の子供、まどかちゃんとその弟の琢磨くんは、本当なら、早苗さんの子供達の伴侶になってくれるはずだった。少なくとも、親たちはそう願っていた。

たった四人しかいない子供のうちの二人が失われ、残された二人は、血の繋がった兄妹でしなくて。

そうして皆は、世代を越えてこれまで何とか繋いできた、同族の系譜の終わりが見えているという事実には、とうとう直面しなければならなくなっていた。

私からすると『直視するの遅すぎ』とも言えるのだけど。

そう思うのは、私が『時期外れの子供』で、少し突き放して見ているからかもしれない。

レポートの骨子を組み立て終わって。一息ついて、伸びをする。

雅也くんはと見ると、今度は漢字ノートに向かっているようだ。

小さい手には余るような長い鉛筆を握って、せつせと手を動かしている。下を向いている顔にかかる睫毛が、やたらに長い。

私は、自分の分の牛乳で喉を湿らせて、レポートの本文にとりかか

る。

以前早苗さんに、雅也くんは子供なのに大した集中力ね、と誉めた時、早苗さんは、『それが、家ではそんなでもないのよ』と、謙遜していた。

『ここでは、弥生にいいとこ見せたくて頑張ってるんじゃないの？ 一人前に』などと祖母も笑っていたが、多分勘違いか、脚色だろう。

これが噂に聞く仲人口というやつかも？ などと一瞬でも考えてしまった自分に、げんなりする。

こんな子供相手に馬鹿らしいし、そもそも私たち皆は所詮、行き止まりにいるのだから。

私たち同族の寿命は、一般に短い。今まだ六十代の祖母が、ずいぶん長生きだと言われるくらいに。

何故なのか、理由は分からない。

私の両親のように病気で、というのなら、『空気か食べ物か何か、この世界のもの合わないせいで』と思えるのだが。

香苗さん達のように、事故に合う人も少なくないのだ。

生きる期間が短いと、子供の数も多くはならない。ただでさえ、同族の間でしか子供が持てないのに。

生まれにくい上に、死に近い。

もしかしたら、この世界が何らかの意思を持って、異物である私たちを排除しようとしているのでは、などと。埒もない考えを抱くこともある。

何れにせよ、私たちは今、行き止まりにいるのだ。それを受け入れられるかどうかは、別にして。

香苗さん達が亡くなったときの、早苗さんの嘆きようは、とても見ていられないほどだった。何でも話し合えた仲のいい妹と、子供達の未来への希望とを、同時に失ったのだから。

早苗さんが私という存在を思い出したのは、彼女がまだ苦悩の底にいた頃で。息子の将来を憂うあまりの、私への懇願だったのだと思う。

『お願いよ、弥生ちゃん。どうか、雅也のお嫁さんになってあげて』  
冷静に考えれば、無茶もいいところなのだが。

レポートの 本文を書いている途中で、ふと目を上げると、雅也くんが何故かこつちをじいつと見ていた。

「何？ どうしたの？ お腹すいた？」

「うっん、違う。ええっと………髪」

「何？」

「髪。キレイだなんて、思ってた」

「…はあ？ 何で？ ああ、真っ直ぐだから？」

早苗さんもこの子達もくせ毛だからかしら。へんなクセじゃないから、そっちの方が見栄えがする気がするんだけど。

「まあいいけど。大きくなったら、よその女の子にそういうこと言わないようにね。誤解を招くから」

そう言つと、雅也くんが何故か気落ちしたように俯いたけど、こは注意しておいてあげないと。

この子の綺麗な顔でああいうこと言っちゃつと、舞い上がる子がいる気がする。恋愛対象にできるわけじゃないのに、気を持たせるのは可哀想だ。

年頃になつたときの、彼の苦労を想像して、ちよつと可哀想になる。異性にいくら好意をよせられても、応えられるわけでもなく、要らない恨みを買うことも多いらしい。

早苗さん達の若い頃も、そういうのがあつたみたいだし、唯菜ちゃん的身にも間違ひなく振りかかるだろう。

私みたいな周囲に埋没できる容姿の方が、マレピトとしては生きやすいのではないかと思う。

「おやつにお菓子何か買って帰ろうか、どうする?」

スーパールのカートを押しながら、隣を歩く雅也くんに聞いてみた。お昼御飯の後、彼を連れて買い物に来ていた。

カートの中には、『お一人様二パックまで』の今日の特売品が、四パック入っている。

付き添いの小学生だって、『お一人様』のうちに数えていいはずだ。…多分。

「おかしは、いらないけど。おやつ、弥生ちゃんのホットケーキがいいなあ。ダメ?」

「……いいけど、別に」

……何ですか、その上目遣いのおねだりモードは。威力があるので、何だか、微妙な気分になる。

時折、やりきれなくなるのは、同族とそうじゃない人達が、まるで違って見えるからだ。

存在感がまるつきり違うのだ。こんな小さな子供でさえ。

惹き付けられる、というのか。目が行ってしまっし、他の人よりくつきりと、鮮やかに見えてしまう。

ー それ以外の人たちが、霞んで見えるほどに。

それを疎ましく感じてしまうのは、多分、私が時期外れの子供だからだろう。

子供の頃は、いつか遠くへいきたいと、ずっと思っていた。

同族の中に伴侶を得られないのに、同族にしか目がいかないのでは……あまりに、不毛すぎるから。

誰も知らない土地で、同族でない誰かを見つけて。思い合って暮らしていけたら、と。

そうして、同族の中だけで閉じた、この世界に拒まれていく運命を覆して。この世界の人たちと同じ存在になって。そして。

「弥生ちゃん？ どうしたの？」

急に声をかけられ、はっとして手元を見る。ホットケーキの材料を広げたまま、しばらくぼんやりしていたようだ。

「つかれたの？ ぼく、なにか手伝おうか？」

「ああ、そうね。じゃあ、材料計ってくれるかな。分量覚えてる？」

「うん！」

いいお返事だ。

いつか遠くへ行きたいと、そう思っていた自分からは、随分遠くへ来たようだ。

あの頃悩んでた自分を、否定するわけではないけれど。

世間の恋愛至上主義、カップル至上主義に毒されていたと、今は思う。

大事な事だと思わないわけではないけれど。でも、人間って、それだけではないから。

「弥生ちゃん、はかったよ。牛乳でしょ、小麦粉でしょ、砂糖でしょ、ふくらし粉に、あと、たまご」

「どれどれ。うん、ちゃんと覚えてたか。えらいじゃない」

頭を撫でてあげると、嬉しそうに目を細めた。

この子や唯菜ちゃんに、どんな未来が待っているのか、今はまだ分からない。

いずれ同族の最後の一人になりかもしれない、なりそうな気のする彼らに、世界が少しでも優しいことを願っている。

もしもこの先、彼らが行き詰まることがあったなら。

『時期外れ』の私だからこそ、言ってあげられることもあるんじゃないかと、思っている。いつか、多分。

――できることなら。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6834y/>

---

時期外れの子供

2011年11月20日19時34分発行